

招ばれた。若い頃から腕達者だった親方は、上は福島から下は美濃中津あたりまでのお大尽の建築には必らずというくらい手を出していたから、俺もこの十年間にかんりの物持ちの新築披露について廻っていた。

この日、俺はおかみさんが織ってくれた盲縞の単衣の筒っぽに半纏をひっかけた親方のお供をした。

披露の席には小袖に大小をたばさんだ生衆たちが兵頭に從って上座を占めていた。俺は下の座に控えて彼等の様子を見ていると、彼等は唐土の煎茶々碗を手にし、生意気にも高台なぞさすって、「これは京焼でござろう」「いや唐津でござろう」などと一人前の御託を並べ、膳が出て酒の席になると、「この塗は輪島でござるか、平沢でござるか」「いや根来でござろうぞ」などとほざく。

俺が徳利を手にして生衆に注ぎに出ると、木の嗅ぎ分けについては人後に落ちぬ俺様を前にして、「三間通しの檜の長押は立派でござる」とか、「あれよ、障子の骨にいたるまで総檜で申し分がござらぬ」などと、満座に聞こえよがしにお追従をついでいる男がいる。

このへんが俺のもって生れた悪い癖で、黙って放って置けばいいものを、つい口を出して、「失礼とは存じますが、長押の材は杉で、障子の骨はあすひでございます」と教えてやると、彼等は互に顔をつき合わせて、なあんだ、たかが木挽の小僧の分際で……という目つきで俺の方を見る。

そのうちに代官の娘の美代が唐棧に黒縞子の衿をかけた台所姿で席に来て酌に廻った。青二才共はお美代に八ちゃんVをつけて馴々しく呼びかけ、こんどはきざな町方弁を使って

「頭の桃割れがスゴく格好いい」とか、「腰の線が魅力的だ」とか、人間と人形を取り違えた失敬なことを云い放ち、満座の中でお美代をからかうのである。主人の代官も居並ぶ客も苦そうな顔で酒を飲んでいたが、隣に居た大工の又六が俺の膝をつついて、「これさ、沐猴にして冠すとは奴等のことをいう。大工は元来、木工だが大の字がついている、わい」と小声でささやくのである。

あすひ問答

そのうちに、お追従を放った髯の男が徳利をさげて俺の前に罷り来て、「拙者、美濃の国は太田の郷士・梅林藤吉郎の四男藤四郎と申す者、少時より忍びの道に志ざし、逐電流を研鑽すること十余年、諸国遍歴の途次、兵頭先生に邂逅、腕前を見込まれ此の度屢従、当地に罷り出でし者、何卒末ながくお見知り置き願いたい」と名乗るのである。そして「貴公は？」というので、そこで、「拙者、敷原の百姓・名梨野権兵衛の嫡男、俗称猫八と申す者。何も取り得はござらぬが、変木流木挽の業に励むこと十年、材の鑑別については昨今興許となり申した。何卒お忘れなき様……」と応じた。すると彼は、「先刻、貴公があすひと云われたが、その材は如何なる

ものでござるか」と云う。俺は、「あすひとは翌檜と書き、明日、檜になろうという木で、あすなるとも称び、また檜葉ともいう。外目は檜に似ているが、中味は全く異う。これをわかり易く人間に譬えれば、外装だけに格好いい意匠を凝らし、中味は犬も斬れぬような錆び刀をさげて、無精髯など生やした犬ざむらいのようなもので……」と云い終らぬうちに、藤四郎はムカツとなって座に刀を取りに立ち上った。

李下の冠

羽織袴で端し近に坐っていた主人の代官が、これを取り静めようと袴の股立ちを取って立ち上ったが、その時すでに、娘の美代が宥めていた。腕まくりをして藤四郎は強がりを見せたが、結局、事なくて済んだ。

立った主人は、暫く所在なさそうな面持ちだったが、心をと直したふうに、こんな挨拶をした。

「今は兵頭殿以下多数の御臨席を賜わり、身に余る光栄と存じます。お恥かしきおもてなしにて、ご無礼の段幾重にもお詫び申し上げますが、最初の煎茶々碗は当家先代が尾張義直侯から拝領の唐物・天啓の古染付。次にお手許の酒盃は高麗、李朝など色々でございますが、兵頭殿のお手持ちは雲鶴青磁。これらの酒盃は床の懸物と共に文祿の折に加藤清正公が朝鮮から招来したものと伝えられます家伝にございます。軸の詩は唐の韓退之、書は明の文徵明でございます。酒肴の至

らぬところをこれらにて補いを願ひ上げ、何卒ごゆるりとお寛ろぎ下さいませ様。

さて、新築の材は木挽五郎七の宰領で、檜と申す上材は一本も使用致しておりませず、御覧のようにあすひ以下の下材にて仕上げましたるもの。美林に囲まれたる代官屋敷が甚だお粗末でお見苦しいかと存じまするが、これも李下の冠の一興と御ろうじ、お目こぼしの程を心から願ひ上げまする。

主人の挨拶が終ると、客を代表して兵頭が祝辞を述べ、そのくりに、主人に向って、韓退之の詩を読めという。代官は少しく胸を反らして、「木曾川筋の者は大工や木挽の職人でさえ、この程度のものを読みなせませす」と云って、俺にその詩を読んでみろと云うのである。

馬の耳に念仏

文徵明の書はわりあい読み易い。俺はこれまでに一、二拝見したことがある。韓退之のこの詩は太平記にも引用されているほど我が国人に親しまれている、と親方から教わっていた。

一封朝に奏す九重の天

夕に潮州に貶せらる路八千

聖明の為に弊事を除かんと欲す

肯えて衰朽を將って残年を惜しまんや

雲は秦嶺に横たわって家何くにか在る

雪は籃関を擁して馬前すまます

知んぬ汝が遠く来たる応に意あるべし

好し吾が骨を瘴江しやうかうの辺に収めよ

代官はこの詩について、「韓退之が時の皇帝・唐の憲宗に對して、諫めの書を奉り、皇帝の怒りにあい、瘴癘しやうれんの地・潮州に流された時の詩である。この時、退之の兄の孫にあたる湘が大叔父の身を案じて、籃関まで伴れ添って来たが、雪が深く進むことができない。彼は湘に向って、「お前がここまで伴れ添って来てくれた気持はまことに有難いが、もうこの辺で引き返すがいい。すでに帝の逆鱗ぎやくりんに触れた儂は再び都に立ち戻ることはなく、辺疆に朽ち果てるであろう。その時は蕃地の川辺に俺の骨を拾いに来てくれよ」と、云い聞かせて、湘を長安に還らしめた。この詩はまことに清正公の風尚に叶ったものである」と、説明を試みた。

代官は目附役・兵頭に對して、韓退之の孤高の気概を示し、一矢を酬いるつもりだったが、無学文盲の彼等に何ほどのことが解つたろうか。おそらく、猫に小判、馬の耳に念仏であつたであろう。

振る舞い酒に酔い痴れた風顛共は打ち倒れて鼻提灯はなとちゆうちゆう。李朝白磁の盃洗に虫が溺れ、木曾谷の夜は更けて、遠い森から仏法僧が聞えていた。

筋違

その後のある日、兵頭が親方を訪ねて来て、「山廻りの手伝をせよ」と云うのである。彼は、親方が隠居して無駄飯を食っていずに、木の目効きの経験を生かして老後の御奉公をせよ、とすすめるのである。親方は老齡の身でありとうていお役に立てないからと固辞したが、お上の命だから名目だけいいということ、ふだん着に雪袴姿で毎日番所へ出仕していた。

俺は平素は木挽の仕事に精を出していたが、何か事あると親方の代理として引き出されて、当てがい扶持で兵頭の手下に使役されていた。

その年も秋となって、黄櫨わづが色ずきはじめた頃、彼等にはわかにか色めき立ち、お上から千石の檜材を搬出せよとの命があつたと云って、木曾谷きつての美林に手をつけようとするのである。この山は、枝下二丈、目通り二尺の大木が四、五百本北向きの谷を埋ずめていて、下草はシットリとした杉苔が人の足首を没するほどに厚かつた。

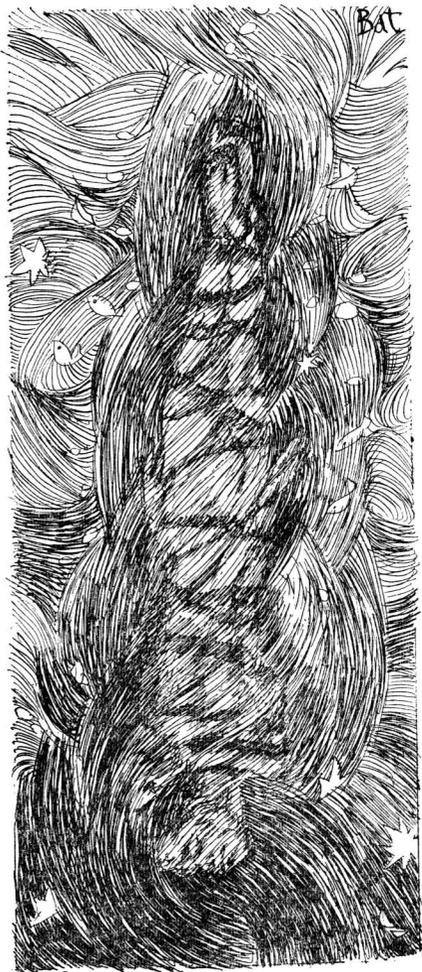
俺は番所に呼び出されて、親方侍立の前で兵頭から命令を受けた。その内容は、全山の立木を保存の甲木と伐採の乙木に区別せよ。甲木には目通りに繩三筋を巻き、乙木は無繩むなづなとし約千石を見積れ、というのであつた。

俺は荒繩の大束を担いで谷を上り下りしてこの作業をやつ

たが、木の鑑定に関して、素人山師の彼等と屢々意見を異にし、口論にもなつたが、木性を見抜く俺の自信は彼等の言いを少しもいれなかつた。併しながら、木を見ることだけを専一と心掛け、人間の筋違いを見分ける修業を怠つていた俺は、結果において彼等一党の畏おそれに陥ち、かつがれて利用されたことになつてしまった。

彼等は無繩の乙

木ばかりを伐ると
思いきや、三本繩
の甲木のうちでも
甲上とされるもの
を数十本伐り倒し
てしまった。俺は
伐り出しの様子を
見に来ていた兵頭
に、「お武家さま
甲木を伐つてはい
けましねえ」と忠



寝覚床
木曾川の水で生ぶ湯をつかい、その水でこれまで生きてきた俺だから、暗い流れに身をまかせていても淀みや早瀬の勝手は承知しているものの、着のみのままがんにがらめに縛られては動きがとれず、流されてついに寝覚床の渦に巻き込まれてしまつた。岩穴の中に首から揉み込まれたかと思つたと、足首が急に宙吊りの形となつて逆立ったまま奈落の深みに吸いこまれて行く。そのうちに

平岩に乗せられて横転しながら

言したところ、兵頭はいやに不機嫌になり、「余計なことに口出すな」と一喝し、なおも食い下る俺を杖でピシリと打ち、「そのままには捨て置けん」と、手下に命じて俺を荒繩で縛り上げ、引き立てて夜の木曾川に突き落とす。

滝壺に落ち込み、沈むと思うとゆっくりと流されて行く。そんな間にも、俺はこんなことではまだ死にされるものではないという感じが強く、死への安らぎが悟りきれずに、どこかに生きる光の道が通じて行くような気がしていた。そうしているうちに繩がゆるんだのであろうか、片手が抜けたので、

その手で片抜き手をきって岸に這い上った。

九死に一生を得た俺は暫くの間、岩床に身を横たえ、夜色に身を預けていたが、そのうちに岩盤に響く瀬音が不思議にも俺の耳に、△普門品▽の調べとなって伝わって来るのであった。

△若し大水の為に漂わさるるも、其の名号を称せば、即ち浅き処を得ん▽

△或は囚われて枷鎖に禁ぜられ、手足紐械せられんにも、彼の観音の力を念ずれば 釈然として解脱することを得ん▽

これらの句に続いて、五言の偈が立ち昇る川霧のように、次々と俺の脳裏に湧き立ち、それが大気の中に一つづつ吸い込まれて消えて行くと、次に瀬音が明けの梵鐘の響に変わって、その中から思いもよらぬ△心経▽が力強く、俺を揺り起すのである。

△……心無罣礙、無罣礙故、無有恐怖、遠離一切顛倒夢想、……是大神呪、是大明呪、是無上呪、是無等々呪、能除一切苦、真実不虚……▽

夜がほのぼのと明けそめ、紅葉が音もなく舞い落ちて川瀬に流れ去るのを見て、俺は急に寒さを覚えだし、起き上って着物を絞り、トボトボと福島の親方の家さして歩いて行った。

親方は俺を裏の毛見屋にかくまい、おかみさんが着替へと熱い粥を差し入れてくれた。俺は土間に藁を敷いてその中にもぐり込んで、やがて深い眠りにおちて行った。その眠りの中

に取り沙汰されていた。

これに反して一方、俺の親方は、△木性の鑑別の立場にありながら、故意に美材を伐らしたのは、情を知ってのことであらう▽と、その筋から深い嫌疑をかけられて、一味と共に名古屋へ引き立てられていった。

その日

の夕方、親方の家の濡れ縁に、△五郎七分▽と筆書きのある金包みが置かれてあった。これを見つけたおかみさん



は、狐にしまったらうつろな目つきで、それを俺のところへ持って来て、「こんな大金をどうしずいか」と云うのである。相談をかけられてみると、筆が兵頭の手であることから、俺もいささか不安になり躊躇したが、そのまま放り出しておくわ

で大夏高樓が紅蓮に包まれて、その焰の中から不動明王が現われて、火の雀を八方に撒きちらす夢を見た。俺はその絢爛たる莊嚴と、連打の半鐘に打ちひしがれて、目を醒ました時には着替えた寝巻がグッショリと汗ばんでいるのに驚く次第だった。

落ち鮎

兵頭一味は伐った材を川におとし、そのうちでも甲上ものばかりを美濃中津に揚げて、売り捌いたのである。料亭・木曾川樓に時ならぬ灯が輝き、絃歌のさんざめきが三日三晩続いたという。三晩目の夜、彼等仲間の博奕のもつれから、諍が起り、やがて大乱闘となり、高樓に火が放たれた。炎々と燃えさがる火をくぐって、煙の中から仲間の金を攫って逃げた男がいた。その男はその足で福島の大官屋敷へ走り、一味の所業を代官に注進したのである。そんなことから事が暴れて、彼等一味は落ち鮎の群に投網が打たれたように、一網打尽に挙げられてしまった。

この中津事件の余波を食らって、福島の人々もざわめき立っていたが、俺の関わり知ったことではないので、俺は向う河岸の火事を見るつもりで、菓の中にもぐってジツと事の成り行きを窺っていた。白昼堂々、役柄を利用してのこの度の官材の横流しは、彼等平素の言動から見ても、△天網快々粗にして漏らさず▽という言葉や、△因果応報▽という言葉で一般

けにもいかず、さりとして、返す目星もないこととて、親方の葬式代にもと思つて、預かって置くこととし、胴巻きに入れた。徒党が潰滅してからも暫くの間、俺は毛見屋で寝起きしていたが、昼となく夜となく、鼠が「チュウチュウ」と鳴き廻る。このままじっとしていたのでは親方への忠義立てになりかねる。何を措いてもこの際、思いきって代官の前に出て、親方の無実を申し開くに如かないと思つて、俺は立ち上った。

黄金の水

代官屋敷に参向した俺は、玄関の三和土に土下座して、俺のこの手で挽き割った樺の上框に手をかけ、親方の明かしを繰り返し繰り返し弁じた。代官は、今日に限って韓退之の剛毅木訥をサラリと忘れたかのように、「それにしても、大役を代理のお前に委かせて、昨日今日の役人衆に、木の誤りを犯させた五郎七の罪は重い。いずれお取り調べが済めば、黒白が明かになるであろう」と、恰も、さわらぬ神に祟りなしの云いまわしで取り合わないのである。俺はどうしてもあとへ退かず、ツイと奥へ引込む代官に、親方の無実を声を大にして訴え、俺を親方の身代りにしてくれとせがんだ。そうしているうちに、五、六人の若衆が俺を門外に突き出し、つき出された俺が、石畳に胡坐を組んで居座っていると、口々に、「この不義不忠者、よくも悪人共に力を貸しておいて、しゃあしやあととしてけつかる」と罵り、「泥猫失せろ」と怒

鳴って、糞尿を俺の頭から浴せかけた。俺は黄金まぶしのぬた猫のような姿でその場を退き下ったが、手を下した男の中に、あの髻男の梅林藤四郎がいたことは実に意外であった。髻はさっぱりと剃りおとしていて、それまでのような無頼の風体ではなかったが、過日のあすなる問答の悪しみをここで一挙に晴らしてやろうという意気に燃えさかっていた。俺はこの男こそ、仲間を売って代官に媚び、お美代に近づいてこれを葉籠に収めようとして、数々の仕草を重ねて来た者に違いないと判断した。俺も予想外だったが、彼の方も、まさか木曾川の土左衛門が白昼堂々と現われるとは夢にも思っていなかったであろう。

観世音南无佛与佛有因縁佛
有縁佛住僧縁帝樂我淨朝念
親世音暮念親世音念心起
念心不離心

延命十句觀音經 宮田武義氏筆

は始めて正気になり、動悸の高鳴るのを覚えるのであった。この丑の刻参りの女は、残してあった下駄から、兵頭の人娘のお鶴であることがわかったが、たとえ俺の仇かたきの手柄とはいえ、若い身空で父の命乞いのために丑の刻参りを続けて、満願を果たさずに人に見られて、悲願が成就しなかったのは、事の偶然とはいいながら可愛想なことをしたと思っている。

そんなことがあってから、兵頭一味のお仕置きの報らせが届いた。これでお鶴も断念したのでろう、それから姿を現わさなくなった。俺は親方の首もすでに胴体から離れたものと思いき、延命は断念し、次の晩からは、親方の成仏を念じて、専ら般若心経を誦誦した。

仏の路銀

三日月が西にかたぶき、鏝鈿の星が空にきらめきかけて、岳嵐に煽られる裸木が箒のように揺られて、この星屑を掃き落とそうとする寒い晩、俺はいつものように観音堂の戸を開けて、中に這入ろうとすると、そこに人が坐って居るではないか。思わぬ人影にギョッとした俺は、お恥かしいことながら、この時も鳥肌立ち、髪の毛が総だつのを覚えた。その姿は正しく向うむぎの男の姿で、後頭の禿から幽かに光を放っている。逃げ出しそうになったが、平素から光頭の幽霊はいないと確信していた俺は、闇の中の一縷の光明によって、心

この糞尿が悪かったせいか、それ以来眼を病み続け、人の勤めるあらゆる療治を試みたが、効き目はなく、後になってとうとう失明してしまった。

丑の刻

俺の親方は、いつも木を挽きながら、延命十句觀音經を唱えていた。観世音、南無仏、与佛有因、与佛有縁、佛法僧縁、常樂我淨、朝念觀世音、暮念觀世音、念々從心起、念々不離心。このお経を十年間に百万遍も聞かされた俺は、門前の小僧習わぬ経を読むようになってしまった。

福島村はそれの樺の森の中に觀音堂がある。親方が引き立てられた晩から、俺はその堂に参籠して、このお経を繰り返えし唱えて、親方の無罪放免を祈った。

或る晩、時季はずれの生暖かい西風が枯れ葉を吹き寄せ、軒先の風鐸が音を立てる真夜中、勤行を終えた俺が堂の戸を開いて、外へ片足を踏み出すと、その闇の中に、口を開いた女が立っているではないか。俺は、この時、頭の毛が総立ちになるのを覚えた。怖れで髪の毛が天を衝くという経験は生まれて此の方、この時が始めてだった。おぼろな月明りを背にした女の髪の毛が風に煽られて、ふわりとこっちに靡きかかる。俺は踏み出した足を咄嗟に引きつけて、戸をパチンと閉めた。女が悲鳴をあげながら走り去る気配に総毛立った俺

もやや静まり、落ちつきを取り戻すことができた。禿の様子と、猫背の具合から、親方らしく感ぜられもしたのだが、低音で繰り返えし唱える十句觀音經は他人の声ではない。名古屋で既に首が飛んでいる親方がどうして此処に坐っているのだろうかと、いぶかしく思っていると、まぎれもない五郎七親方は誦經を区切って、こっちに向き直り、こんなことを云うのである。「お前が毎晩この堂に籠って、自分の無罪を祈念していたことは、牢の中で觀音さまが夢枕に立って知らせて下さった。吟味の末自分は、さいわいに無罪放免となり、二日前に牢を出た。お上では、自分の身代わりに弟子、つまりお前を差し出せと云うのである。お前への捕り手が既に出されている。それに後れをとるまいぞと、二日二晩、寝ず休まずの旅を続け、やっとのことで、さっきこの森に辿りついた。さいわいに人目を避けて堂に忍び込むことができた。こうした巡り合わせもお互の念力が仏に通じたためであろう」と。そして、「しめし合わせてお前を逃がしたとなると、取り返しのつかぬことになる。夜が白む前に此処を抜け出て、人目をさけて江戸へと逃げのびろ」と、云うのである。

そこで俺はあれ以後の顛末をかいつまんで話し、胴巻きの金包を取り出して渡そうとすると、親方は、「そんな金はピタ一文受けとる訳にはいかぬ。お前が猫ばばして逃げたしまったことにするのはいかぬ。これが仏の路銀というもの、有り難く頂いて置かっしゃれよ」と、俺の手に突きもどし、手を